

人間の質的差と「論理」の前提

氏 家 洋 子

もう、20年も前のことになるのだが、兄弟の1人（その一）が親に何かを買ってくれとせがんだことがあった。親がだめだと言うのにやめないものだから、私はなぜそれがほしいのか聞いてみた。すると、「友達が持っているから」という返事が返ってきた。

それで考えてみたのだが、人が持っているから自分もほしいという考え方を自分自身は持っていないことにその時気付いた。私がそう言うと、兄弟のもう一人（その二）が自分も同じだと言った。すると、こんどは親の方が、それはおかしい、誰だって人がいい物を持っていたら自分もほしくなるはずだと言う。そして、その頃は戦後まだ10年もたっていない頃で、多くの人が物質的に貧しかったわけだが、私の親は私と私の兄弟の一人にそうした欲望がないのは、貧しさのために欲望すらわかないのであろうと推理し、また、そのことをかわいそうに思いつつも言った。

しかし、その解釈を聞いていると、当の自分の心の状況からかけ離れている、自分の気持にそぐわない、と感じざるを得なかった。「そうじゃないのよ。」と言いながら、どう自分の気持を説明したらよいかわからず焦りを感じている時、兄弟のその二がこう言った。

「たとえば、友達が何かシャツを着ていて、それがいいシャツだったとしても、ただ、『あ、着ているな』って思うだけなんだよ。」

これを聞いて私は思わず、

「あ、それ、それなのよ。」と言った。

この世である価値を付与されている物質的なものを目にした時、私と兄

弟の一人はその存在を認識したのみであった。それを特定の価値観をもって認識するのは、どこかでその情報を得、その価値意識をわがものとしたあとのことであろう。兄弟は同じ家庭で育ており、戦後の物質的に豊かでない時代を、言ってみれば精神主義的に育てられた。と言うよりは、親のそうした生き方がどこかに影響を及ぼしていたはずだと思うということであるが。そして、しかも兄弟のその一はその二より6才下で末子であった。なぜ彼にだけ物質に対して我々と違う価値観があったのか。彼が小学校低学年の頃だったと思うのだが。

前号で私は日本語にある、或る種の感情を表現する語に、日本人である私自身にも心からわかるとは言えないものがあるということを書いた。ここでは、さしづめ、他人が持っているから自分もほしいという欲求の論理の理解云々ということになるだろうか。

そうではなくて、やはり、人によって感情の動き・持ち方が違うように、欲望の有無・多少・傾向といったものに個人差があり、「他人が持っているから」という「論理」は実は「口実」にすぎないということになるのではないか。あるいは、本来持っていた欲望の呼び醒まされる「契機」と見るべきではないか。

本来そうした欲望のなかった、あるいは薄かった私であったために、その「理由」を聞くという出方をしてしまった。その時、尋ねられた兄弟その一は「契機」を答えたということではなかったか。

親はそれを「論理」と見、その限りで「当然と考えた。にも拘らず、実行できなかった、あるいはしなかったのは経済的理由によるか、あるいはそれが可能でも何か道義的なものが働くということはある得るだろう。それはともかく、親がその「論理」を認めているのに、10才前後の私達が、「そういうことじゃない」と言わざるを得なかったのは、その「論理」を成立させる所に人間の質の違いを感じたからではなかったか。成立したあと

は「論理」として認められる。しかし、それを成立させるか否かの所に大きな違いがあるのではないか。

ことさらに、幼時の記憶を引っ張り出さざるを得なかったのは、その当時受けた何か不思議な感触が今なお私の胸にその原因は何だったのか釈然とさせたいという形で尾を引いて残っていたからでもあるが、人間の違いというものが幼時からかなりはっきりあるものだという一例になるとも思ったからである。

日本人論というものはそれなりに一定の意味を持つものであろうが、そういう形で相対化されてしまう時、実は日本人という人間の中に感じ方・考え方に言うまでもないことだが著しい差異があるということを忘れてはならないということもまた、思うのである。

(語研 専任講師)